ハルが斬る！

KUSAN

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

思いつきで書いているので、変な所とかあると思います。そこはスルーでお願いします。

目次

1話 …… 1
第2話 …… 5
第3話 …… 10
第4話 …… 13
第5話 …… 15
第6話 …… 18
第7話 …… 21
第8話 …… 24
第9話 …… 27

1話

ここどこだ？
気づいたら何もない世界にいた。
よし、めんどくさいから寝よう。

「八坂　ハルさん寝ないでください。起きてください。」

声の聞こえた方を見ると、可愛い人がいた。

「なに？」

「八坂ハルさん。あなたは私達のミスで死んでしまったのでこれから転生してもらいます。」

死んだのか。
転生するならいいか。

「わかった。なら、転生してくれ。」

「え！私達のミスで死んでしまったのに何も言わないんですか？」

「考えるのがめんどくさい。それに、また生きていけるならどーでもいい。」

「分かりました。ちなみに、あなたが今から転生する世界はアカメが斬るの世界です。」

アカメが斬る？
それってどんなの？

「今から大まかなあらすじを頭に送りますね。」

おお！

これはすぐ死んでしまうな。

転生する意味全くないな。

「早く死なないために転生特典を決めて貰います。この札の中から好きな札を３つ選んで下さい。」

そう言われ俺は３つ選んだ。

転生特典

１　英霊エミヤ

Ｆａｔｅ　ｓｔａｙｎｉｇｈｔのアーチャーの能力をそのまま使える

２　英霊クー・フーリン

Ｆａｔｅ　ｓｔａｙｎｉｇｈｔのランサーの能力をそのまま使える

３　写輪眼

万華鏡写輪眼にはならない。

これなら、俺も生きていけそうだな。

「ところで、俺ってどういう所に転生するの？」

「それは運なのでわかりません。ただいきなり、死にそうなところではないですよ。」

「わかった。あ！転生させてくれてありがとな。」

「いえいえ。こちらこそ、すいません。じゃあ、頑張って生きて下さい

ね。」

神にそう言われ俺は転生した。

転生してから五年がすぎ、俺はパルタス族という危険種を狩っている狩猟民族で暮らしている。まだ、危険種を狩ったことはないがいつか狩ってみたいとおもっている。

「ハルー。どこにいるんだー？」

俺をよぶ声が聞こえたので俺はその声の方に返事をした。

「部屋にいるから入ってきていいぞー。」

「わかった。」

そう言って入ってきたのが俺の幼なじみのエスデスだ。

「ハル。今日も一緒に訓練しよう。今回は私が勝つからな。」

俺はいつもエスデスと一緒に早く危険種を狩れるように訓練をしている。

そして、勝負も毎回している。

ちなみに、成績は俺の２０勝５敗だ。

神様の特典で一応は身体能力も高くはなっているが、能力は使えるだけですぐにバテる。

なので、まずは体力作りをしていこうと思っている。

「わかった。なら訓練しに行くか。」

そう言うと、エスデスは笑顔になり走っていったので、俺もその後に付いていった。

第2話

あれから、3年後
俺は8歳になり、明日初めての危険種を狩りについて行くことになった。

「おい。ハル早く準備しろ。」

長にそう言われ俺は、槍をもって集合場所まで向かった。
集合場所につくと、エスデスもいた。

「今日ってエスデスもくるの？」

そう聞くとエスデスが気分を悪くしたのか、俺とは逆方向を向いてしまった。
そして、俺が何か悪いことしたかと思い考えていると、エスデスが喋りかけてきた。

「私がついて行ったら何か問題があるのか？」

「いや、俺はエスデスと一緒に行けるのがうれしいんだ。だってこれまで一緒に訓練してきたから、狩りに行くときも一緒がいいだろ。」

そう言うとエスデスは顔を赤くし下を向いてしまった。
俺は大丈夫か？と声をかけようとしたが、長が俺の頭に拳骨を落としたので声をかけることができなかった。

「この女たらしが！」

長がそういいながら、向こうに行った。

なんで俺は殴られたんだ？

そして俺たちは、移動しながら獲物を探していた。

「おい。エスデスとハルは止まれ。」

そう言われ、エスデスと俺は止まり長の見ているほうをみた。

そこには危険種がいた。

気づかれないように、長と他のメンバーが合図を出して襲いかかった。

そして見事危険種を狩ることができた。

俺はエスデスに話しかけようと横を向くとエスデスがいなかった。

あれ？

エスデスとこにいった？

まさかあいつ、一人で狩りに行きやがったな。

俺はエスデスが行ったと思われる方向に向かって走った。

エスデスＳＩＤＥ

私は今ハルと一緒に長たちの狩りを見ていた。

視線をそらすと、危険種が寝ていたのでチャンスと思い一人で近くに行くことにした。

ハルと一緒に行こうかとも考えたが、私の方が先に危険種を狩り、自慢しようと思い１人で行くことにした。

そして近くまで行き、首を斬ろうとしたが危険種が目を覚まし、私の剣は空を斬った。

危険種は私の攻撃を避け、攻撃を仕掛けてきた。

避けられると思ってなかった私は、相手の攻撃を防ぐ事はできたが、武器を手放してしまった。
さらに危険種が攻撃を仕掛けてきたので、精一杯避けていたが、逃げ場がなくなった。
そして、危険種は止めを刺そうとしたのか、思いっきり攻撃を仕掛けてきた。

「ハル。助けて。」

私はなぜかそうつぶやいていた。

ハルＳＩＤＥ

「エスデス！」

俺は間一髪危険種とエスデスの間に入り、エスデスへの攻撃を防いだ。
危なかったな。
もう少し遅かったら、エスデスが死んでいたかもしれない。
そんな事を考えつつ、エスデスに声をかけた。

「大丈夫か？」

俺は倒れているエスデスに手を差し出した。

「ありがとう。」

エスデスはそう言いながら、手を握ってくれた。

「なら、あの危険種は俺達で狩るぞ。俺達なら余裕だろ。」

「当たり前だ。」

俺は相手の攻撃を避けつつ槍で攻撃していった。すると、相手に隙ができエスデスが危険種の首を一閃した。

「やったな。」

俺は片手をあげハイタッチを求めたがエスデスが抱きついてきた。

え？

いきなりどうしたんだ？

俺は頭の中は混乱状態だが、何故こんな状態になったか聞くことにした。

「いきなりどうしたんだ？」

「死ぬかと思った。助からないと思った。もう、ハルと一緒にいれないと思った。」

エスデスは泣きながら言ってきた。

確かに、さっきは危なかったからな。

「エスデス。俺はお前とずっと一緒にいる。これからもずっとだ。だから泣くな。それに、もし今回と同じような事があったら、俺がまたお前を守ってやる。」

そう言うと、エスデスは笑顔になった。

今思ったがこれ告白になってね？

まぁ、エスデスが笑顔になったから別にいいか。

「約束だぞ。」

「ああ。約束だ。」

そして、俺達は長達が居るところに戻っていった。

第3話

一番最初の危険種狩りから2年がすぎて、俺は10歳になった。
エスデスとの関係はあまり進まず、友達以上恋人未満みたいな感じだ。
今回の狩りは、エスデスと俺でどっちが良い獲物をとれるか、勝負することになった。

「じゃあ、行ってくる。エスデス気をつけろよ。」

「じゃあ、私も行くね。ハルも気をつけてね。」

そう言って俺達は山の方へ向かっていった。

ハルSIDE

中々危険種とは遭遇せず、はじめに遭遇した危険種を狩って1日で俺は帰ることにした。
帰るとそこには、火の煙が立ち上り戦ったあとが残っていた。

「おい！誰か返事をしてくれ！」

すると、近くからうめき声が聞こえた。
近くに行って見てみると、声の正体は瀕死の状態の長だった。

「長、大丈夫か？」

「ハルか。一族は全滅しちまった。北の異民族がいきなり国境を越えて攻撃してきやがった。まぁそんなことは良い。俺の最後の頼みを聞いてくれ。」

一族が全滅だと!?
俺は北の異民族に対する怒りで我を忘れそうだったが、長の最後の頼みを聞くために、何とか我慢した。

「最後の頼みとは?」

「エスデスを頼む。あいつは少し危なっかしい所がある。それを抑えてやれるのはお前だけだ。頼むぞ。」

エスデスはまだ生きているのか。
よかった。

「任せろ。俺はエスデスと約束したからな。だから、大丈夫だ。心配しなくていい。」

「ありがとな。」

そう言って長は息を引き取った。

すると、遠くから声が聞こえた。

「おい!こっちに生き残りがいるぞ。始末しろ。」

まだ、相手がいたのか。
辺りを見渡すと50人くらい兵がいた。
俺は約束を果たすため、こんな所で死ぬわけにはいかない。

I am the bone of my sword.
―――――― 体は剣で出来ている。
Steel is my body, and fire is

my blood.
血潮は鉄で　心は硝子。
I have created over a thousand blades.
幾たびの戦場を越えて不敗。
Unknown to Death.
ただの一度も敗走はなく、
Nor known to Life.
ただの一度も理解されない。
Have withstood pain to create many weapons.
彼の者は常に独り　剣の丘で勝利に酔う。
Yet, those hands will never hold anything.
故に、生涯に意味はなく。
So as I pray, unlimited blade works.
その体は、きっと剣で出来ていた。

「なんだこれは！」
「どうなってるんだ！」
所々からそういった叫び声が聞こえてきた。それも、つかの間一人一人に剣が飛んでいき、悲鳴に変わった。
それは一方的な蹂躙だった。
「エスデス。俺は生き残ったぞ。」
そう呟き、敵の兵士全てを殺した俺は気を失った。

第４話

エスデスＳＩＤＥ

私はハルとの勝負に勝つために山中で３日間くらい粘り、エビルバードの希少種を狩った。

「これで、ハルとの勝負は勝ちだな。」

気分良く帰っていると、私達の集落あたりから、煙が立っているのが見えた。

いやな予感がしたので、急いで帰ってみると集落が壊滅状態だった。

真っ先に私の頭にはハルが浮かんだ。

「ハル！返事して！」

叫びながら、ハルや生きている人を探しているとお父さんが倒れていた。

近くに駆け寄り、生きているか確認したが亡くなっていたので、ハルを探そうと辺りを見渡すと近くにハルが倒れていた。

「ハル！大丈夫？」

私はハルを、抱き上げ返事を待った。

「エス…デス？良かった……死んでなかったな。」

そう言ってハルは気を失った。

ハルＳＩＤＥ

天井がない。月が見えるって事は夜か。

ん？何か温かいな？エスデスか。

起きたらエスデスがくっついていたので起こすことにした。

「おい。エスデス起きろ。」

「んー。ハル??ハル！体大丈夫？怪我してない？」

「大丈夫だ。とにかく落ち着け。」

エスデスが落ち着くと今回の俺が分かっている事を全て話した。

話し終えると、エスデスは下を向いてしまった。

「ハルは死んだりないよね？」

「当たり前だろ。エスデスを置いて死んだりしねーよ。それに、約束しただろ？」
　そう言うとエスデスは笑顔で抱きついてきた。
「そうだったね。ずっと一緒にいてくれるもんね。」
「当たり前だ。エスデス。俺はエスデスのことが好きだ。お前は絶対死なせない。」
　そう言って俺もエスデスの背中に手を回した。
「ありがとう。私もハルのこと大好きだよ。」

「やっと口で言ってくれたね。」
　エスデスが何か言ったが俺には聞こえなかった。

　そして、次の日。
「ハルはこれからどうするの？」
　正直まだなにも決めてない。
　でも、俺は神様の特典を使いこなせていないのが分かった。だから、修行しようと考えていた。
「俺はまだ弱い、弱すぎる。だから、自分に自信が持てるまで修行しようと思う。」
「それなら、私も一緒について行っていい？」
「分かった。だか、ある時期になったらエスデス一人で帝都に行き士官してくれないか？」
「なぜ、私一人なんだ？ずっと一緒にいるって言ってくれたじゃないか！」
「それにはちゃんと理由がある。でも、今は言えない。理由は帝都に士官してほしい時にちゃんと話す。その時に納得したら頼む。」
「分かった。」
　エスデスは渋々頷いてくれた。
　こうして、俺達のこれからの予定が決まった。

第5話

あれから、１０年の月日が流れた。
エスデスとは2、3年くらい一緒に修行していたが帝都に士官してもらった。
その時は決闘をして、勝った方がお互いの意見を聞くということになり、ギリギリで俺は勝った。
それでも納得はしてなかったので、帝都で再会したら何でも一つ言うことを聞くという形で渋々納得してくれた。
その時の決闘は神様の特典は使わなかった。使うときではないと思ったからだ。
そして、俺は２０歳になり、帝都に行こうと思った。
「ここが帝都か。人が凄く多いな。」
俺はどうゆう物があるか見渡しながら歩いていた。
「おーい！そこの君。」
声がした方を見ると、金髪の美人が話しかけてきた。
「君は帝都に士官しにきた口かな？」
ん？一応そうなるのかな？
「まぁそうだな。」
「君は運が良かったね。私の知り合いに頼んで推薦することもできるよ。」
でも、エスデスに頼めば大丈夫だろ。
「いや、俺も知り合いがいるから大丈夫だ。」
「そうなんだ。まぁ何かあったら話聞くよ。」
「ありがとな。見ず知らずの美人さん。」
そういって俺は宮殿の方に歩いていった。

レオーネＳＩＤＥ

私はさっきお金をたかろうと青年と話していた。結果は失敗に終わったが、美人と言われドキッとした。
「君は悪にそまらないでくれよ。」
すると、次は帝都に稼ぎにきたと顔に書いてあるわかりやすい少年が歩いてきたので次の獲物にしようと決めた。

「エスデスはいるか？」
俺は宮殿の近くの兵士にエスデスがいるか聞いた。
「おい！お前エスデス様を誰だと思っている！」
そうか。エスデスは将軍になったんだったな。
「いるか、いないか教えてくれ。」
「お前みたいな礼儀知らずな奴に教えられるか！」
こいつ、話聞く気ないな。
困ったな。脅すか。
「もし、俺が知り合いやったらお前どうなるか分からんぞ」
「一応連絡だけしてやるからそこで待ってろ！」

数分待つとさっきの兵士が顔を青くしながら歩いてきた。
「申し訳ありませんでした。エスデス様の知り合いとは知らず失礼なことをしました。」
「次から気をつけてね。で、エスデス何て言っとった。」
「はい。ただいま向かうと言ってました。」
すると、上から気配がしたので上を見るとエスデスがこっちにくるのが見えた。
そして、地面に着地した。
「ハル！遅いぞ。何年待ったと思っている。あと、気づいたなら受け止めてくれてもいいだろ。」

そういいながら、抱きついてきた。
「悪いな。エスデスより強くなろうと思ったらそれ相応の事しないと駄目だからな。」
「ほう。なら久しぶりに決闘でもするか？まぁ今回は私の勝ちだかな。」
「凄い自信やな。なら、近いうちにやろうな。」
こうして、俺とエスデスが闘うことが決まった。

「あと、俺これから帝都で暮らして…「私の部屋にすめばいい！」ありがとな。」
有無を言わせない顔だったので俺は一緒に暮らすことにした。
「じゃあ、決まりだな。なら部屋に案内しやろう。着いてこい！」
そう言われエスデスの後をついていき、部屋に着いたら大臣から呼び出しがかかってしまい、エスデスは不機嫌そうに出て行った。

第6話

エスデスが大臣に呼ばれてたので俺は荷解きをし、それも終わり、
「することなくなった。それにしても、エスデス遅いな。」
コンコン
誰だ。一応返事するか。
「エスデスはいないぞ。」
「いや、エスデス様ではなく、大臣がお客様もお呼びになりました。」
俺もか?まぁこれから宮殿に住むかもしれんし挨拶でもするか。
「わかった。なら、案内してくれ。」
「着いてきて下さい。」
兵士について行き、扉を開けると太ったオジサンとエスデスがいた。
「あなたがエスデス将軍の恋人のハルさんでよろしいですか?」
「そうだが。あんたが大臣か?俺に何かようか?」
「実は、エスデス将軍に北の異民族を討伐を頼んだ所、あなたも一緒に連れて行くと言い出したので、どんな人物か見てみたいと思いまして。」
そうゆうことか。
北の異民族と言えば俺達の一族を滅ぼした所か。
「そうゆうことだ。ハル一緒に行くぞ。」
まぁめんどくさいけどいいか。
「分かった。じゃあ、大臣そうゆうことで戻って良いか?」
「はい。わざわざ出向いてもらってすいません。」
「エスデスはどうする?」
「私も部屋に戻ろう。」
そして、エスデスの部屋に一緒に戻っていった。

次の日の朝帝都を出発し、北の異民族討伐のため目的地に向け歩い

ていた。
「この前の勝負のことなんだけど、先に北の勇者の首をとった方が勝ちにしね？」
「なら、城を別々に一人で攻めることにしよう。」
一人で城攻めか、面白そうだな。
「よし、なら決定な。」
「合図は私が出そう。上空に氷が上がったらスタートだ。他の兵達は手出し無用だ。」
こうして、勝負の内容が決まり目的地を目指した。

北の要塞都市南側
ハルＳＩＤＥ
久しぶりのエスデスとの勝負だから負けられないな。
本気でいくか。
我が骨子　は　捻　じれ　狂う。
「――――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．」
カラド、ボルク
「――〝偽・螺旋剣〟」
矢が城塞を破壊した。
「なんだ！一体どうした！」
所々から叫び声が聞こえてくる。
よし、道は開いたな。あとは突き進むのみかな。
「侵入者だ！迎え撃て！」
そして、前方から５０人近い敵兵が武装しながら向かってきた。

トレース　オ　ン
「――――投影、開始」
「――――憑依経験、共感終了」

ロールアウト　　バレット　クリア

「――――工程完了。全投影、待機」

フリーズアウト　　ソードバレルフルオープン

「っ――――停止解凍、全投影連続層写……!!!」

すると、投影で出てきた剣や槍などが一斉に敵に向かっていった。

まぁだいたい片づいたな。あとは中心に向かって歩けばいいやろ。

第7話

ハルＳＩＤＥ

俺は城門を破壊し、向ってくる敵を倒して歩いていた。向かってこず逃げる敵はほっとく事にした。そして、中心に向かって歩いていると北の勇者といわれるヌマ・セイカが目の前に現れた。

「お前が侵入者か！俺が直々に相手をしてやろう！」

来たか。

あっちから現れてくれるとか、探す手間省けたな。

「　　トレース　オ　ン

〃――――――投影、開始」

俺は投影でゲイボルクを投影した。

俺は特典でクー・フーリンの能力を使えるためこの槍は本物にかぎりなく近いものを投影することができた。

そして、3割くらいの力で戦っていると、相手の動きが鈍くなってきた。

こいつ弱すぎる。

俺達の一族を滅ぼしたから、強いと思っていたが弱いな。

ただの勘違い野郎か。

「弱い。一気に終わらせる。」

「なに？」

俺はいったん相手と距離をとった。

「突き穿つ死翔の槍」

そういって槍を投げると相手の心臓に向かって一直線に飛んでいった。

相手は武器で防ごうとしたが、破壊して心臓を貫いた。

「弱かったな。てか、エスデス遅いな。」

そして俺は北の要塞都市を一時間弱で攻略した。

エスデスＳＩＤＥ

私はハルとの勝負に負けてしまった。獲物が自分からハルの方に向かったからだ。
そして今、大臣から北方一族を見せしめに酷い仕打ちをしてくれと頼まれていた。
「よし、今から北方一族の仕打ちを始める。」
そう言って始めようとすると
「待てエスデス！それはしなくていい。もう勝負はついた。あとは、帰るだけだ。」
「見せしめをしないとまた、つけあがってくるぞ。」
「向かってきたら潰せばいい。こないなら、する必要はない。それでも、するっていうなら、俺だけ帰る。」
それは駄目だ！
ハルとはこれから絶対離れないと決めている。
仕打ちなんてどうでもいいな。
「私も帝都に戻る。兵達は予防として、一応残っててくれ！」
「「はい!!」」
そうして、私とハルとわずかの兵達で帝都に戻った。

ハルＳＩＤＥ
何とか仕打ちなどをさせなくて済んだ。
正直この世界はおかしい。
まず、帝都そのものがクソすぎる。
また、人の命を軽く見すぎる傾向がある。
エスデスにもその傾向は見られる。
俺が小さい時にしっかりと教えてなかったら喜んで拷問とかをやっていただろう。
俺は相手から殺しにかかってこないと、手を出さないつもりでいる。だか、この世界のほとんどの人はイラついたら殺すなど腐った行為を平然と行っている。
「これから、どうするかな？」

俺はこれからのどういうことをするか考えながら帝都に帰った。

第８話

俺は帝都に戻りこれからどうするかエスデスに伝えるため、エスデスを探していた。
すると、どこかに出掛けようとしているエスデスを見つけた。
「エスデス。これから、どこに行くんだ？」
「ちょっと商店街へ買い物に行くんだが、一緒にこないか？」
そう言われ急いで話すことでもないので一緒に出掛けることにした。

今俺達は商店街を歩いている。行く店行く店でエスデスに賄賂を渡してくるやつがほとんどだ。
エスデスは要らないと言って断ったが他の奴らなら受け取っていただろうな。
やはり、この国はダメだ。
ん？
誰かがこっちを見ているな。
「エスデス。お前なんかした？」
「うーん？大臣に言われ仕方なく殺した奴の家族とかか？」
俺達は小声で話しながら今隠れている奴が誰なのか考えていた。
「エスデス。先に帰っててくれ。俺用事思い出したからちょっと帝都に戻るわ。」
「わかった。」
俺はエスデスにそう言い、俺の意味を理解したのか頷いてくれた。

レオーネＳＩＤＥ

私は今北方異民族討伐を終えてきたエスデス将軍がどんな人物か見るために帝都に来ていた。
そして、エスデスを見つけたはいいが、エスデスと仲良く話している青年がいた。
「あの青年は!!」
そう、タツミの前にお金をたかろうとした人物だった。

エスデスと知り合いだったのか？
あのエスデスの突破口になると思い私は監視していた。
すると、青年の方が帝都に戻っていった。
私はどうするか、悩んだがもうちょっとエスデスを監視しようと思い監視していた。

「尾行の正体はあの時のお姉さんか。」
え！
後ろから気配もなく声がしたので驚いて振り向くとそこに、いたのはさっきまでいた青年だった。

ハルＳＩＤＥ
俺は尾行の正体が気になり見にきたら帝都に来たときに話しかけてくれたお姉さんだった。
「なんで、俺達をつけてたのかな？」
うーん、やっぱり話してくれないか。
どうすっかな？
あんまり逃がす気もないしな。
そんなことを考えていると
「君こそエスデスとはどういった関係かな？そして、帝国の兵とかかな？」
質問を質問で返してきたか。
まぁ答えても大丈夫だろ。
「エスデスと俺は幼なじみだ。そして、エスデスは俺の彼女だな。あと、帝国とは無関係だ。さて、俺も質問に答えたんだお前は誰だ？」
「君はナイトレイドって知ってる？」
ナイトレイド。噂の暗殺集団か。
「知っているがそれがどうした？」
「私はその一員でエスデスがどんな奴か見に来たんだ。」
エスデスの偵察か。
何となくわかったから、帰るか。

「大体の事情はわかったからもういい。疲れたから帰る。」
そう言うとお姉さんはポカンとしたのでその隙をついて宮殿に戻った。

第9話

俺はナイトレイドのお姉さんとの話しが終わり次第宮殿に戻りエスデスの部屋に向かった。
「エスデスいるか？」
「こっちにいるから入ってこい。」
そう言われたのでエスデスの部屋に入った。
「尾行してた奴の正体はどんな奴だったかわかったか？」
俺はエスデスに聞かれたので、さっきあったことをありのままに話した。
「そうか。でも、なぜ犯罪者をつれてこなかった？」
「それは、俺が帝国の兵では無いからだ。あと、めんどくさい。」
「ハルらしいな。」
そして、俺はこれからどうするかをエスデスに話すことにした。
「エスデス。俺は常々この帝国が正しいのか疑問に思っている。だから俺はこの国を変えるために革命軍に入ろうと思う。正直エスデスに帝都に士官するように言ったのは俺だ。だから無理にとは言わないが一緒に来てくれると助かる。」
そう言うといきなりエスデスに頬を叩かれた。
「私は確かに帝都に士官し、帝国の将軍にまでなった。でもこれは、ハルのためなんたぞ。ハルがそう言ったからやったんだ。そして、それは今も変わらない。ハルと一緒にいるならどこでもいい。私をなめるな。」
「エスデス。ありがとう。俺には勿体ない女だな。」
そう言って俺はエスデスを抱きしめた。

そして、これからどうやって動くかなどについて話す事にした。
「エスデスに革命軍の知り合いとかいるか？」
「知り合いではないが、リーダーの名前くらいならわかるぞ。」
「誰なんだ？」
「ナジェンダといって昔帝都で将軍をしていた女だ。まぁ私ほどでな

いが中々強いぞ。」
「そうなのか。」
待てよ。エスデスって革命軍にどういう風に思われているんだ？
最悪革命軍に入れなくね？
「エスデス。お前革命軍にどんな風に思われとるかわかる？」
「んー、まぁ良い印象ではないだろうな。北の異民族も一応革命軍らしいからな。しかも、大臣の命令で仕打ちなどをたくさんやってきたからな。もしかしたら、革命軍には入れないかもしれない。」
一瞬不安そうな顔を見せたので俺は思っている事を言った。
「エスデスが革命軍に入れないなら新しく帝国討伐部隊みたいの作るから問題ないぞ。」
すると、安心したような顔になったので話しを戻すことにした。
「ナイトレイドって革命軍なのか？」
「多分革命軍に入っているんじゃないか？」
「なら、帝国を脱退し当分はナイトレイドを探しつつ様子を見るって事になるかな？」
「わかった。これからもよろしくな。ハル！」
「こっちこそな。エスデス！」
そう言って俺達は寝ることにした。